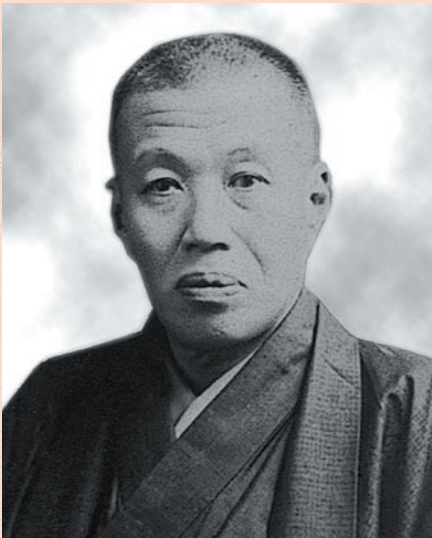


川柳

いのうえけんかぼう

萩市
(1870～1934)



【著作】

『新川柳六千句』（大正6・南北社）
『川柳を作る人に』（大正8・南北社）
『井上剣花坊句集』（昭和10・叢文社）

川柳革新のバイオニア、井上剣花坊は、明治三年（一八七〇）に、萩市で生まれた。気宇壮大、進取の気性に富み典型的な長州人であった。その一面、ジャーナリスト的な頭脳の持ち主で、常に時代を先取りした。それが川柳にも反映している。

上京して日本新聞社に入ったが、同社は国家主義を標榜し、古島一雄や長谷川如是閑ら多くの論客を擁し世論をリードしていた。また一方では正岡子規という近代文学の先駆者らにも活動の場を与えた。

剣花坊も新聞『日本』を拠点に新川柳を唱した。そのため徹底的に古川柳を研究したことは、蕉風の理念の一つである「不易流行」にも通じるものがある。剣花坊は川柳を平民詩とか国民詩とか呼び、そうした視点で作句したが、晩年は独自の王道主義的プロレタリア川柳を提唱したことは注目したい。

人間剣花坊は大変親孝行な人であった。母を詠んだ幾つかの名句もある。こうした剣花坊を生涯にわたり支えた妻信子の内助の功も偉大である。

二人をしのび萩市民は、比翼塚ともいえる川柳句碑を市民会館前に昭和四十五年（一九七〇）十一月三日、文化の日を期し建立した。

飛びついて手を握りたい人ばかり

剣花坊

国境を知らぬ草の実こぼれ合ひ

信子

（文・和田健）

何よりも
母の乳房は
甘かりし

萩市江向の生誕地に建てられた句碑



巣立ちした
あとははじめの
二羽になり

萩市内には、多くの句碑が建立されている。

井上剣花坊 年譜

（提供・和田健）

後五百年 凡駒生まれて また千里

憧れを 画がけと空は たゞ蒼し

突き進む にぎりこぶしへ 当る風

親といふ 宝はみんな 持つてゐる

絶頂で 天下の見えぬ 霧の海

見ただけで 碑文は読まず 皆通り

新しい 心になりぬ 初日の出

黎明に ひとり座つて 神を待つ

いっぱいに よろこびを吸ふ 朝の窓

結び切る やがてを落つる 花の露

名剣に なるに火に入り 水に入り

巣立ちした あとははじめの 二羽になり

伊達巻で 朝とひるとの 飯を食ひ

偉大なる 存在なりし 松下塾

紅葉ほど 小細工をせぬ ハツ手の葉

活眼を 開けばブミが 眼に入り

（萩市内の句碑に採られた句
『井上剣花坊全句集』より抜粋）



明治3（一八七〇）年	明治17（一八八四）年	明治20（一八八七）年	明治23（一八九〇）年	明治24（一八九一）年	明治25（一八九二）年	明治31（一八九八）年	明治32（一八九九）年	明治33（一九〇〇）年	明治35（一九〇二）年	明治36（一九〇三）年	明治37（一九〇四）年	明治38（一九〇五）年	明治40（一九〇七）年	明治42（一九〇九）年	明治45（一九一二）年	大正2（一九一三）年	大正3（一九一四）年	大正4（一九一五）年	大正5（一九一六）年	大正6（一九一七）年	大正7（一九一八）年	大正8（一九一九）年	大正10（一九二一）年	大正12（一九二三）年	昭和2（一九二七）年	昭和4（一九二九）年	昭和5（一九三〇）年	昭和8（一九三三）年	昭和9（一九三四）年
	一四歳	一七歳	二〇歳	二一歳	二二歳	二八歳	二九歳	三〇歳	三二歳	三三歳	三四歳	三五歳	三七歳	三九歳	四二歳	四三歳	四四歳	四五歳	四六歳	四七歳	四八歳	四九歳	五一歳	五三歳	五七歳	五九歳	六〇歳	六三歳	六四歳

6月3日、山口県萩町江向三区（現・萩市）に生まれる。本名幸一。父は萩藩士、井上吉兵衛（栄祐。母タニ。家貧しくて独学で小学校の教員となり、傍ら神代大介の遊竜塾で漢学を学び、塾頭にまでなる。東京に遊学、従兄の男爵寺島秋介邸に寄食したが、翌21年病気で帰郷。萩郊外、山田村の木間（こま）小学校で教鞭を執る。父吉兵衛（栄祐）7月5日死去（六一歳）。山口町糸米小路に母を連れ転居。三つ年上の士族の娘、山縣トメと結婚。トメの両親は共に美濃派の俳人であった。山口で発行された『鳳陽新報』の記者となる。29年12月5日号からは編集人。当時、秋剣と号していた。三男が生まれたが、産後の肥立ちが悪く11月20日、妻トメ死去。岡信子（旧萩藩士、岡正の長女。山口県病院の看護師）と再婚。三人の子供を母に預け、夫婦だけで上京。雑誌『明義』の記者となり文芸欄を担当。新潟県高田の『越後日報』より招かれ主筆となる。『越後日報』を辞め、上京、日本新聞社に入る。主筆古島一雄の勧めで、剣花坊の号で7月3日より「新題柳樽」を掲載。2月、日露戦争始まる。9月、妻信子が従軍看護師として応召。7月3日、柳樽寺川柳会を結成。11月3日、機関誌『川柳』を発行。日本新聞社の幹部となり多忙のため、24号で『川柳』休刊。日本新聞社を退社し、客員となって引き続き川柳欄を担当。8月『国民新聞』の川柳欄も担当。4月『読売新聞』川柳欄担当（大正10年4月まで）。8月『川柳』を『大正川柳』と改題して発行。2月、司馬健正の名で、『拙者は大石内蔵助ぢや』を帝国軍人後援会から刊。『赤裸々の大石良雄』を啓文堂書店より刊。日本新聞社の客員を辞し、全国川柳行脚に出ること多し。7月、三越で川柳賛画展を開く。10月南北社から『新川柳六千句』刊。11月、母タニ死去（八〇歳）。9月、南北社から『川柳を作る人に』刊。『大正川柳』創刊一〇周年を記念し、全国川柳大会を開催。4月、剣花坊句集『習作二十年』を柳樽寺川柳会から刊。9月1日、関東大震災に遭い自宅も焼失。『大正川柳』を『川柳人』と改題。剣花坊編『大正川柳句集』刊。『川柳人』に『川柳王道論』を連載。6月『川柳人』通巻二〇〇号。『川柳百七十年史』の執筆に専念。『京都帝国大学新聞』に「無産者としての新川柳」を発表。軽い脳溢血で禁酒。3月19日、病をおして帰県。夜萩市公会堂で二時間半にわたり「藩論統一の歴史」と題し講演。9月4日、鎌倉建長寺内の正統院に滞在中、脳溢血でたおれ、11日朝逝去。13日同寺で葬儀。法号、剣花院帰幸道一居士。11月18日、剣花坊追悼全国川柳大会が催される。